

ホッブズは自らの哲学方法論から形相因を放逐したのか

後藤大輔(早稲田大学大学院)

本発表では、17世紀イングランドの哲学者トマス・ホッブズ(1588-1679)が、『物体論』(1655年)で展開した自身の哲学方法論において、形相因をどのように位置付けていたのかを検討する。

ホッブズの哲学方法論については、彼が『物体論』で扱った自然哲学と、『市民論』(1642年)や『リヴァイヤサン』(1651年)で扱った政治哲学との関係(とりわけそれらの一貫性)を論じる際に、しばしば言及がなされてきた。(なお、ホッブズによれば、自然哲学は幾何学と自然学から成り、政治哲学は倫理学と政治学から成る。)例えば、ホッブズの哲学方法論に関する古典的研究を著したワトキンスによれば、ホッブズは、ガリレオやハーヴェイが学んだイタリア・パドヴァ学派の方法論から影響を受けた分解-合成的方法を、自然哲学と政治哲学の双方に適用したのだとされる(Watkins 1973)。

しかし、ホッブズの哲学方法論を理解するためには、分解-合成的方法などの《方法》に着目するだけでは十分とは言えない。なぜなら、ホッブズ自身による哲学の定義に即すならば、『方法論』を《方法》自体から区別し、もう少し広い概念として理解する必要があるからである。

ホッブズは『物体論』第1章第2節において、哲学を次のように定義している。

哲学とは、諸々の結果ないし現象の知得された原因ないし発生の仕方から、正しい推論によって獲得された、それら結果ないし現象の認識、およびこれと反対に、認識された諸々の結果から正しい推論によって獲得された、ありうる発生の仕方の認識である。(Hobbes 1999, 12. [ホッブズ 2015, 16])

この定義には、ホッブズ哲学における認識の対象と、その認識を獲得するための方法とが述べられている。ホッブズによれば、哲学における認識の対象は「結果ないし現象」および「ありうる発生の仕方」である。「発生の仕方」が「原因」と等置され、「現象」が「結果」と等置されていることから(この等置それ自体が孕む問題はひとまず置いておく)、ホッブズ哲学における認識の対象は結果および原因、すなわち何らかの因果関係であると整理できる。そして、上の定義においては、因果関係の認識を獲得するための《方法》が、「正しい推論」であるとされている。

それゆえ、ホッブズ自身によるこのような哲学の定義に照らせば、ホッブズの哲学方法論には、哲学的認識の対象である因果関係についての構想と、その認識を獲得するための方法である正しい推論についての構想とが含まれている、と捉えるのが適切である。そして、方法自体を問題とする以前に、そもそもその方法による獲得が期待されている因果関係の認識とは何なのかを問題にする必要があるだろう。

方法のみならず因果関係の構想にも着目して、ホッブズの自然哲学と政治哲学との一貫性に疑問を投げかけたのが、マルコム(Malcolm 2002)である。因果関係の構想に関するマルコムの議論の主眼は、ホッブズの幾何学・政治学で援用することが想定されている形相因が、自然学で援用することが想定され

ている作用因と、齟齬を来しているのではないか、という問題提起にある。

果たして、マルコムが示唆するように、ホッブズの哲学方法論において形相因と作用因とは齟齬を来しているのであろうか。本発表では、マルコムによる問題提起を踏まえて、ホッブズの哲学方法論における形相因の位置づけを、『物体論』に即して検討する。鍵となるテキストは、ホッブズが形相因と目的因について論じた同著第10章第7節冒頭の、以下の一節である。

作用因と質料因のほか、二つの原因を形而上学者たちは挙げている。それはすなわち、「本質」(ある人々はこれを「形相因」と呼ぶ)と「目的」すなわち「目的因」である。しかし、その両者はともに作用因である。なぜなら、事物の本質をその原因だと言うのは、「理性的であること」が「人間の原因」であるというようなもので、理解しかねることだからである。(Hobbes 1999, 103. [ホッブズ 2015, 162])

ここでホッブズは、形相因が作用因であると主張している。本発表では、ホッブズによるこの主張を、『物体論』中の原因に関する他の記述と照らし合わせながら解釈することによって、以下の三点を主張する。

- 一、ホッブズの哲学方法論において、幾何学・政治学で援用することが想定されている因果関係と、自然学で援用することが想定されている因果関係とは、いずれも物体同士の衝突-被衝突を伴う作用-被作用の関係として理解されている。
- 二、しかし、幾何学・政治学と自然学とでは、物体の衝突-被衝突を伴う作用-被作用としての因果関係を特定する仕方がそれぞれ異なっていると、ホッブズの哲学方法論においては想定されている。
- 三、ホッブズの哲学方法論において、形相因は一貫して作用因の一種として捉えられているため、形相因は作用因と齟齬を来してはいない。しかし、作用因の一種としての形相因は、自然学で援用されるような通常の作用因と同様の仕方で特定されるものとは考えられていない。そのため、形相因を特定するための非自然的な言語が、ホッブズの哲学方法論においては必要とされている。その意味において、ホッブズは自身の哲学方法論から形相因を放逐した、とは言い切れない。

主要参考文献

- Hobbes, Thomas (1999) *De Corpore: Elementorum Philosophiae Sectio Prima*. (ed.) Karl Schuhmann. Paris: Vrin. [ホッブズ, トマス (2015) 『物体論』 本田裕志訳, 京都大学学術出版会.]
- Malcolm, Noel (2002) "Hobbes's Science of Politics and his Theory of Science." in Noel Malcolm. *Aspects of Hobbes*. Oxford: Oxford University Press. pp. 146-155.
- Watkins, John William Nevil (1973) *Hobbes's System of Ideas: A Study in the Political Significance of Philosophical Theories*. London: Hutchinson.